

剽窃はなぜ問題なのか#

牲川 波都季†

ある授業の提出課題において、ウェブサイトおよび他の履修生のレポートからの剽窃が複数見つかりました。故意ではなく不注意で行った場合も含め、剽窃は非常に重大な不正行為です。ここで改めて剽窃とは何か、なぜ問題なのかを説明しておきたいと思います。

剽窃とはなにか

まず剽窃とは何でしょうか。

他の人によって書かれた論文、概念、文章などの著作（特に、他の人によって書かれた著作）の一部または全部を、あたかも自分自身が書いたものとして使用すること。あるいは、自分が書いたものと、読んだ人に誤解を与えるように表記して「使用」すること。

(関西学院大学総合政策学部『履修心得 2020』p. 80)

要は、他人の文章の一部または全部を、自分が書いたように「使用」することです。その前後に自分の表現を付け加えたり、多少表現を変えたりしても、他人の文章の一部を切って使えば、剽窃とみなされます。また、意図的か非意図的かは無関係で、思わず、うっかりやってしまったとしても剽窃には変わりありません。

その結果は、試験中の不正行為（カンニング）と同様、当該学期の全科目が 0 点になる、あるいは内容によっては停学や退学にもなりえます。

本資料は、今年度牲川が「日本語文化論」および「言語政策論」の授業で配布した資料に加筆・修正したものです。

† 関西学院大学総合政策学部

なぜ問題なのか

文章は、ある人が内容と書き方を自分の力と時間を使って考え、自分で書いたものです。文章には、内容と書き方両方についてのその人固有の考えや想いがつまっています。ですから、それを書いた人の名前を示さずに、自分のものであるかのように写したり要約して使ったりした場合、最初に書いた人からその人の書いたものを盗んだこととなります。

特に、大学に代表される学術の世界は、剽窃を大きな問題とみなします。学術界は、先に生み出されたアイデアを踏まえた上で、自分自身のオリジナルなアイデアを見つけ出し、それを書いたり話したりして公にすることで、さまざまな問題を解決しようとする世界です。この世界は、参加する人々がそれぞれのアイデアを大事にしあうことで発展してきました。そうしたアイデアが詰まった文章を、互いに固有のものとして大事にしあわなければなりません。

学術界をそこに参加する私たちがみなで守り創っていくためには、どのような人が書いたものであっても（たとえ友人のレポートの文章で、その友人が「写してもいい」と言った場合であっても）、その人が書いたたった一つのことばとして大切にしなければなりません。それを大切にしないことは、学術界の信頼関係と発展を崩す行為です。そのため、レポートや論文に剽窃が見られた場合、学術界の中心である大学は、きわめて厳しい対応をとります。

ではどうすればよいのか

授業ではレポートを書く機会が多数あります。遠隔授業が多くなった今年度は特に書いて出す課題が増えていると思います。その場合、辞書、本、論文、新聞、教科書、ウェブサイト上の記事など、授業での配布資料や指定文献以外の資料を使うこともあるでしょう。

剽窃をしないために注意してほしいのは、どのような種類の資料でも、それを参考にした場合、必ず

- ・どの資料を参考にしたのか、
- ・その資料を参考にしたのは、自分のレポートの中でどこからどこまでか

を明記しなければならない、ということです。これは文章そのままの引用ではなく要約して使用した場合も同じです。ほかの人のアイデアを使う場合には、必ず誰の何をどこに使ったのかを明記してください。

この人のこの文章を踏まえ自分はこう考えたということをきちんと書けば、わざわざ資料を調べた上で、自分の意見を構築したレポートとして高く評価されます。しかし、引用元や引用箇所を明示しなければ、剽窃として厳しく処せられます。引用の仕方は、天と地ほどに評価を分ける重要ポイントです。

授業の課題と剽窃

ここまで、剽窃の定義、問題点、解決策の基本を書いてきました。

最後に、授業課題で剽窃することが、それをした本人と採点者側の学びという点でいかに不適切かという視点で補足説明をします。

まず、授業の課題は教育目的があって出されています。その課題に、他者の文章も利用しながら適切に答えるためには、他者の文章自体の十分な理解が不可欠です。そのような理解の上で、引用元・引用箇所を明確にし課題に答えることができれば、それは課題に対する適切な答えとして学生本人にとって学びになると同時に、授業の教育目的を達成することができます。

それに対し、課題で剽窃をしている場合、課題で問われていることを十分に理解せず、関連のありそうな他者の文章の一部を安易に切り貼していることが多く、課題に対する答えとしてずれたものになります。もちろん課題に答えることによる学びも得られませんし、授業の教育目的も果たせず、時間と労力をただ浪費するだけです。

そして採点する教員の側からすると、剽窃一つが見つかれば、他の履修生も剽窃しているのではないかと疑うことになります。私にとって課題の採点作業は、履修生一人ひとりの学びや経験を確認したり、新しい見方を知るための機会です。これは履修生との創造的な協働作業ともいえます。しかし一部の履修生の剽窃によって、課題の採点は、剽窃の確認作業という不毛な作業へと変質してしまいます。

私の授業では、Turnitin という自動で剽窃を確認するソフトを利用していますが、たとえソフトを使わずとも、教員には剽窃か否かがおおよそ判別できるものです。文章の書き方と内容には、書いた人特有の流れや癖があり、剽窃した部分はそこから浮いて

見えるからです。それほど、ことばは、その人のその時のものなのだとと言えるでしょう。

教員にばれるからではなく、自分や他者のアイデアとことば、そして学びを大切にするために、剽窃は絶対にやめてください。

2020年11月13日